

幼児期の終わりの子供の姿と、その育ちを共有する

差波 直樹

要約 平成30年4月から施行されている幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示され、小学校就学前後の子供の育ちの具体的な姿として示された。そして、それは就学前の教育と小学校教育が、お互いの教育の理解を深める一つのきっかけとして、またその教育を語り合う際の共通言語としての役割も担うところである。では、実際の幼児期の終わりの子供たちの姿はどのようなものだろうか。ここでは、実際の幼児期の終わりの子供たちの姿を捉え、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と照らし合わせながら、幼児期の教育と小学校教育とのつながりについて考察するものである。

1. はじめに～研究の目的

平成30年からの3法令（幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領）の施行において、各園、各施設における幼児教育の整合性が図られた。そこでは、幼児教育において育みたい子供たちの3つの資質・能力が示され¹⁾、また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されたところである。

幼稚園教育要領においては、この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を、「第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するものである。」²⁾とし、また、幼稚園教育を通した幼児の成長を幼稚園教育関係者以外にも、分かりやすく伝えることにも資するものとして位置付けている³⁾。

ここで示された、「幼稚園教育関係者以外」には、小学校の教師も含まれている。同じく幼稚園教育要領には、「幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。」⁴⁾と、その役割が別に示されている。

さて、この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」であるが、幼稚園教育要領を始めとする3法令、またはそれらの解説において、具体的な例などが示されている。この研究では、その具体的な例を実際の遊びや生活における子供の姿を事例やエピソードとして挙げながら、幼児期の子供の育ちの意義について考察していきたい。また、この考察が、幼児期の教育の理解の促進と、幼児期の教育とその後の教育とのつながりを確かめる機会としたい。

2. 研究の方法

幼稚園における年長5歳児クラスの3月の姿を観察、動画撮影をし、その姿からいくつかの事例やエピソードを挙げて、考察する。さらに、どのようにその姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として捉えるか、提案する。

※観察は、2023年（令和5年）3月8日、9日に実施した。

※保育場面の撮影と、それを元にした事例化について、研究の趣旨を観察対象幼稚園の長に説明し、承諾を得た。

3. 事例と考察、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との照合

観察園は A 市の公立幼稚園である。3 年保育で、各学年 1 クラスずつ配置されており、年長クラスは担任（女性教諭）1 名、副担任（男性教諭）1 名が配属されている。副担任は、個別の支援担当教諭としての役割もある。

(1) 事例①「車のコースづくり～遊び出し」

8 日（火）の朝、登園してきた年長児たちは、それぞれがこの日にしたいことを言葉にして表していく。それは時には担任や副担任などに対して表し、時には友達に対して表している。

この日の職員朝会では、担任が、「昨日は、修了式（卒園式）に向けての取組に多くの時間を割いてしまったため、子供たち自身が興味や関心に基づく遊びを進める時間を十分にもてなかった。クラスの子供たちもそのような思いで降園したので、今日は自分たちのしたいことに存分に取り組めるように支えたい。」と述べていた。

ある女兒は、朝の所持品の始末を終えた後、担任に編み物の続きをしたいことを伝えた。担任はすぐにテーブルを部屋の隅に設置し、そこで編み物の続きをできるようにした。その女兒は、自分のロッカーから編みかけの毛糸と手作りの編み機を持ってきて、一人で作業を始めた。

別の男児 A（以下 A 男）は、後から登園してきた男児 B（以下 B 男）に、「車（くるま）、する？」と声をかけ、B 男がうなずくと前日までに発泡スチロールトレイで作った信号機を手にする。その様子に気付いた女兒 C（以下 C 女）も二人に近寄っていき、一言交わすとその遊びに加わっていった。この遊びについては、担任も朝会の時に、「A 男らは、車遊びの続きをするだろう。C 女もこの遊びに参加していたので、その遊びが始まったら加わっていくと思う。」と述べていた。

B 男の所持品の始末が大体終わるタイミングで、3 人は保育室に隣接する教材庫の中から段ボールの箱を運び出してきた。その箱には、前日までに作ったと思われる様々な素材が入っており、順を追ってその中から必要なものが取り出されていく。（図 1）

また、教材庫に入りきらなかった、大きな段ボール箱は、保育室の外の廊下においていたようで、そ



図 1 「前日までに作った物を大事に取り出す」

れも B 男と C 女が廊下へ出て、二人で箱の前と後ろを支えながら保育室に運び入れてきた。

(2) 事例①の考察「自分の力で遊びを進めていく充実感」

多くの園（幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園）では、この時期に、子供たちが自分の力で生活や遊びを進めていく姿を願うのではないだろうか。数年間、その園で積み重ねてきた経験を生かしつつ、それらを展開していく姿を願う。

この園の期の指導計画（およそ 3 ヶ月ごと）⁵⁾では、年長 5 歳児の 1～3 月の発達の過程として、「自分の力を発揮して自信をもって生活する時期」とし、期のねらいの一つに、「自信をもって行動したり、自分たちで主体的に生活を進めたりする喜びを感じる。」と掲げている。

実際にこの場面でも子供たちは、自分の「今日はこの遊びをしたい。」という思いを描きながら登園し、その後すぐにその遊びを展開しようとする姿が見られる。また、その思いを、保育者や遊びの仲間である友達に表し、自分なりに、または自分たちなりに実現しようとしている。保育者は、そうした子供一人一人の思いが表されたときに、その思いを受け止め、またその思いが実現できるような援助を行なっていることがわかる。

さらに保育者は、そうした一人一人の子供が思いを実現することができるように、遊びを予想し、それぞれの思いが表された時点で環境を構成、再構成できるように教材や用具を準備している。この車の

コース作りでは、子供たちが自分の力で遊びの準備も進められるように、その素材を取り出しやすい場所に収納しておく、という配慮も感じられた。それによって、「この遊びをしたいと思う」から「実現する」までがよりスピーディーでスムーズである。

渡辺⁶⁾は、「保育における「環境構成」というものは、保育者側であらかじめなんらかの保育意図のもとにデザイン（設計）するものではなく、子どもが活動の中でさまざまに「デザイン」可能なような資源を提供しておく、ということである。」と述べ、「環境や遊びを構成しておく」というスタンスとは距離を置く。この場面は、まさにその通りで、子供たち自らが遊びやそれに伴う場を自ら「デザイン」しているのである。そして保育者が、それまでの子供たちの遊びの流れや興味を根拠に予想し、必要な教材や用具や場を構成し、必要に応じて再構成を図っていることによって、自分たちで遊びや生活をすすめることの喜びを実感することにつながっている。

こうした子供たちが実感していることや経験していることを、この園では、幼稚園教育で育むことが目指されている資質・能力の一つ、「学びに向かう力、人間性等」と位置付けており、この場面の子供たちの姿からもその育ちが感じられる。

さらに、自分たちで遊びや生活を進める姿は、子供たちが「健康な心と体」、「自立心」、「協同性」、「言葉による伝え合い」、「豊かな感性と表現」といった幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が具体的に現れている姿とも言える。

(3) 事例①「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との照合

「健康な心と体」

クラスの子供たちは、前日の生活の流れからこの日の自分の動きを思い描いて登園してきていることがうかがえる。自分のやりたいことを明確にもち、それを実現しようと自ら、また友達と一緒に動き出していた。自分の力、自分たちの力だけではなく、時には保育者の力も活用しながら、その思いを実現していく姿を捉えることができる。このことで、充実感をもち、自分でできるという自信も積み重なっている。

「自立心」

先にも述べたように、保育者や友達の力を生かしがら遊びを展開している姿も、この自立心の育ちと言える。自分の思いや考えを実現する、という強い思いを持った時に、自分の力だけではできないことにも、これまでの遊びや生活を通して気付いたり実感したりしている。自分でできることと、自分だけではできないことを理解し、行動につなげる姿が育っている。

「協同性」

車のコース作りでは、好きな友達、またはこの遊びと一緒に楽しむという関係性の中で、お互いに共通の目的をもち遊びの場を作ろうとしている。その際、遊びの流れの中で役割分担が何となくではあるがされている。また、遊びの中で様々な発想が出てきた時に、それを認める緩やかさも感じられた。ここで見られる協同性は、これまでの遊びや生活の経験から積み重ねられてきたもので、認め合う緩やかさも、その積み重ねによるものだと考える。

「言葉による伝え合い」

この場面で使われている言葉はそれほど多くはない。しかし、確実に、お互いの思っていることや考えていることは伝わっていると感じられる。それはその前後の仕草だったり、何かを考えている表情だったり、体の動きも見られたりする中で発せられる言葉を互いに理解し合っているからだと考えられる。言葉の多さではなく、その意味の決定打として言葉が使われており、その力を身に付けている。

「豊かな感性と表現」

自分の力で自在に作ったものや友達とデザインした車のコースで、子供たちは、それらを大切に扱い、大事にしながら遊びを進めている。それは互いに、イメージしたもの、形として表したものを尊重し合っているからである。また、それを作り上げていく過程を、お互いに見合い、理解し合っているからでもある。表現することだけではなく、一人一人が表現したものをどのように捉えるか、という部分についても育ちとして捉えられる。

(4) 事例②「ほらD君、出番だよ」

園内のホールでは、保育者も入れて8名の男女児

が「かたき（ドッジボール様のボールゲーム）」を楽しんでいる。コート을パーテーションで区切り、ルールに則って遊びを展開している。

その傍らで、男児D（以下、D男）はコートの外側で円柱状の積み木に腰を掛け、友達が遊ぶ様子を眺めている。眺めながら、側の積み木を手を取ったり、転がしてみたりといったことを何となくしている。表情は、時折笑顔も見られるが、あまり動きは無い。かたきの仲間の一員として遊んでいた保育者も、D男の様子に気づき、遊びの流れの中でD男に近付き、隣にしゃがむ。特に声をかけるわけではないが、D男の様子は視界の端で捉えている。（図2）



図2 「遊びの傍らで過ごすD男」

D男は、友達が遊ぶ様子を見ながら、コートの外に出たボールを追いかけてきた友達に声を掛けたり、ボールの行方を目で追ったりしている。

その後、遊びが少し続き、ボールを当てられた幼児がコートの外に増えてきた。保育者もボールで当てられてしまい、他の幼児とD男がいるスペースに移る。コート内に残っている人数が少なくなり、一方のチームが負けそうになったところで、保育者がD男に声をかけた。

「やあ、ほらD君、出番だよ。ちょっとやってやんないやあ。」と保育者が促すと、D男は少し前のめりになりながら、「分かった。入ーれーて。」と大きな声を出して仲間知らせて。その様子を見た周囲の友達たちは、手を叩き、歓声を上げて喜ぶ。そして、皆がD男の名前を呼び、D男はその応援の声を受けながらボールを追いかけて、投げて、受け止めて、遊びに加わっていった。

(5) 事例②の考察「自信と不安の狭間で過ごす」

幼稚園修了を間近に控えたこの時期に、事例①のように自信をもって過ごす姿が見られるのと同時に、D男の様に普段とは違う姿が見られることもある。修了に対する期待もあるが、慣れ親しんだ生活の場を離れること、好きな友達と離れてしまうこと、4月から始まる小学校での新しい生活などに、ネガティブな心情をもち、不安を示す場合もある。前述した期の指導計画の「この期の姿」の一つに、「カレンダーを見ながら修了までの見通しをもち、修了することに期待や不安をもったり、友達との別れに寂しさを感じたりする姿が見られる。」と掲げられている。

D男は、事例の最後の場面の周囲の幼児の反応から推察すると、体を動かして遊ぶことが好きで得意な男児だろう。好きな遊びが目の前で展開されているが、何とも言えない不安な気持ちや不調さでなかなか遊びに入っていくことができない姿だと考えられる。

保育者もこのD男の姿にはすぐに気づき、心を配っていることが見て取れた。ただ、直接に関わるのではなく、どちらかというと側にいて見守っている、という関わり方である。D男のその不安や葛藤に寄り添い、共感し、受容していると考えられる。この「見守る」という姿勢をもちつつも、この保育者はD男のその先の姿を願っているのだろう。指導計画の配慮事項の一つには、「幼児同士が互いに認め合い、協力して遊びを進めていけるように、友達との関わりの様子や遊びの様子を把握しながら、必要に応じて援助をする。」とある。保育者は援助の「必要性」を幼児の姿と照らし合わせつつ、そのタイミングを探り、援助の具体（例えば、掛ける言葉や身体的動作）を吟味した上で動く。

D男の、少し不安や不調も感じているが、やはり好きなこの遊びには加わっていききたい気持ちもあり、友達の様子を見ていて少しずつ心が動き出してきたタイミングで、「D君、出番だよ。」という保育者の言葉がかかった。実際には保育者はその動き出しに手を添えてはいないが、D男が前のめりになったのは、そうした前向きなD男の思いと、保育者の送り出しのタイミングが合致したことによるものである。これまで積み重ねてきた保育者とクラスの子供たちの

関係性による深い幼児理解と、この時期ならではの子供の心情を踏まえた援助と言える。

そしてこの姿もまた、この園では、「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」といった資質、能力の育ちと捉えており、それを目指したねらいと内容が編まれ、保育実践につながっている。さらに、この場面では、「健康な心と体」、「自立心」、「協同性」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活との関わり」といった幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の具体的な場面としても捉えられるものである。

(6) 事例②「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との照合

「健康な心と体」

幼児期の生活において、子供たちは体を動かすことと前後して、心も動かしている。心が動けば体も動き、体が動けば心も動く。こうした経験を遊びを通して積み重ねている。

この場面では、D男の心はゆっくりと動いている。ただ、「確かに動いている」という捉えを保育者はしたからこそ寄り添い、そのタイミングをはかったのではないだろうか。

その時々で動いたり、止まったり、そのスピードを変えたりする「心」を体感しているところに育ちがある。

「自立心」

自立の対義語は「依存」である。幼児期の子供は、自立を目指す一方で、信頼できる保護者や保育者などの大人にまだ依存していたいという気持ちも強く残る⁷⁾。また、自立するために、他者の力を借りる姿も多く見られる。保育者は、子どもの育ちを一人一人捉えながら、あえて見守る場面ももちつつ、必要な場面では援助、手助けをする。

こうした、「助けが必要な時に助けてもらえる経験」は、他者の力を借りて自立に向かう姿につながっていく。よって、こうした依存しながら自立に向かう姿も自立心の育ちと言える。

「協同性」

友達同士、互いのよいところや苦手なところ、できることやできないことなどを互いに認め合う関係

性がこの時期には育まれていると考えられる。そうした互いの理解のもと、集団で遊びを進める際には、それぞれの特性を生かし合う姿も見られる。

D男が遊びに入って行った瞬間に、拍手と歓声が湧き上がったことは、そうしたお互いの理解に基づくからであり、その理解は別の場面でも協同性として発揮され则认为る。

「道徳性・規範意識の芽生え」

かたきをしているD男以外の子供たちも、なかなか遊びに入ってこないD男は気になっている。中には声をかける子もいれば、見てはいるがそのまま放っておく子もいる。

その場で遊ぶ一人一人が、自分なりにD男の気持ちを察しようとしたり、共感しようとしたりしているからである。その共感は、「きっとD男も、一緒に遊びたいと思っている。」というふうに察していることによるものだろう。だからこそ、遊びに加わって行った時に、他の子供たちは大きく喜んだ。

こうして、他者の気持ちに思いを寄せ、他者と同じように考えようとする姿に育ちがある。

「社会生活との関わり」

この遊びに加わって行った時にD男は、大きな喜びを感じただろう。歓声と拍手で迎えられ、自分の動きに声援を浴びた瞬間に、である。一言で言えば、自己有用感であるが、それは他者との関係性の上に成り立つ。

お互いに特性や役割をもち、それを発揮しながら、またその力を得ながら社会生活は成り立っている。そうした根本的なところを、この場面では経験として積み重ねていると考える。

(7) 事例③「小学校って、こんなところ」

この日、車のコース作りやかたき、編み物などで2時間近く存分に遊び、片付けの時間となった。この1年間に保育者がクラスに投げかけてきた、「ゴミ拾いは、「運」拾い」というキーワードをクラス全体で唱えながら、保育室がきれいになっていく。(図3)

やがて保育室がきれいになり、クラス全体で集まる時間となった。子供たちは保育室の床に膝を抱えて座り、椅子に座った保育者を見上げる形で活動が始まる。保育者からは、7日後に迫った修了式(卒

園式) が話題として挙げられ、その日までに幼稚園でしておきたいこと、したい遊びなど、クラスの子供たちとの対話が進められた。



図3 「ゴミ拾いは「運」 拾い」

その後、保育者はそのまま絵本を手に取り、読み聞かせの時間となる。手にした絵本は、小学校での生活がどのようなものか、写真で紹介していくものである。保育者がページをめくると、その写真(絵)を眺めながら保育者の読み聞かせを聞く。気付いたことや考えたことは、保育者に向けて自分なりに言葉で表そうとする。保育者も時折その言葉に耳を傾け、その言葉で思ったことや感じたことなどを言葉で表しながら応答する。

絵本を通して、小学校の教室の様子や、小学校での生活の流れ、小学校の雰囲気などを子供たちも感じながら聞き入っている。

(8) 事例③の考察「小学校への入学を楽しみにするために」

年長児にとって、小学校への就学はその年長児としての1年間にわたって、家庭においても、園においても、その都度話題にあがるものである。それはやはり、この年齢の幼児(年長児)にとっては大きな出来事であるし、未知の、また新しい生活の始まりでもある。事例②のD男のように、何となく不安であるという心情をもってしまう場合もある。

保育者は、こうした子供の心情を受容し共感しつつ、もう一つの働きかけをしていく。それは、子供たちの心が次の学校段階である小学校へ向いていくように働きかけることと、その際にポジティブな印象を持てるように支えていくことである。

その都度話題にしてきた「小学校」であるが、子

どもたち一人一人の受け止め方は違うだろう。兄や姉と同じ道を歩いて通うことを楽しみにする子もいれば、兄や姉が大変そうに過ごしている姿を見て不安を感じている子もいるかもしれない。勉強することに抵抗感を持っている子もいれば、給食で嫌いな食べ物が出てきた時にどうするか心配している子もいる。真新しいランドセルを背負って登校することを楽しみにしている子もいるし、放課後に友達とどんなことをして遊ぶかを楽しみにしている子もいる。そのように、一人の小学校入学に対する受け止め方、感じ方は様々なはずである。

ただ、この場面での保育者の読み聞かせは、そうした細かい、具体的な部分について知らせることに留意するのではなく、全体として「楽しい場所であること」を保育者の話し方で表現しているように感じられた。それには、「心配しなくても大丈夫。」という保育者のメッセージが込められており、この保育者の思いを子供たちも感じ取っているのではないだろうか。こうした保育者の情愛性も、子供の安心感に大きな影響を与えている。

これらの子供の姿や保育者の関わりは、前述の指導計画において、ねらいにある「自信をもって行動したり、自分たちで主体的に生活を進めたりする喜びを感じる。」という姿と関連すると考える。そしてこの園においては、このねらいが資質・能力の「学びに向かう力、人間性等」の育ちにつながると押さえているところである。

また、この場面で見られる子供たちの姿は、「健康な心と体」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「言葉による伝え合い」の育ちとも関連している。

(9) 事例③「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との照合

「健康な心と体」

この場面では、子供たち一人一人が、生活の流れを理解し、その流れに沿って片付けに取り組み、最後までやり遂げる姿に育ちが感じられる。

幼児期の教育においては、「幼児の自発的な活動としての遊びを中心とした指導」と共に、「幼児期にふさわしい生活の展開」も求められている⁸⁾。子供た

ちは、日々の生活をここまで積み重ねてきた中で、自分たちがどう行動すべきかを考えながら過ごしている。それは自分たちの力で生活を進める充実感にもつながるし、それができるという自信にもつながっている。

「道徳性・規範意識の芽生え」

この場面の「片付け」は、必ずしなければいけないことではない。しかし、全ての幼児がこの行為に取り組んでいる。それは、誰かに強制されてのものではないし、しなければ罰が与えられるから取り組んでいることでもない。

自分たちがこれから使う場所をきれいにする、心地よく過ごすために片付ける、といった暗黙の理解が一人一人にあるからだと考えられる。

こうした意識の醸成も、これまでの生活、暮らしの中で子供たちが身に付けてきたものである。もちろん保育者の積極的な働きかけがあったとは考えられるが、長い時間をかけて身に付いてきた態度である。

「社会生活との関わり」

園や家庭での生活は、社会生活ともつながっている。社会生活の中で、自分がどのような役割を担うべきか、その意識にもつながる場面と考える。

自分の遊んだ場ではないが、そこは自分たちの保育室である。そこをきれいにしようとすることは、その先に続く社会生活においても、公共心をもって行動することにつながるだろう。

「言葉による伝え合い」

幼児期には、この場面で用いられている「ゴミ拾いは運拾い」のようなキーワードを共有することがとても楽しい。この言葉があることで、自分たちの行動に価値を感じ、またその行動への意欲にもつながる。

遊びの場面でも、ちょっとしたキーワードによって、遊びのイメージが共有されやすくなったり、仲間としての一体感をもったりする。

言葉の面白さや様々な使い方があることを、体感的に得ている。

(10) 事例④「修了式(卒園式)の練習に取り組む」(観察2日目)

この日も、ひとしきり遊ぶが、前日より少し早く片付けがはじまった。片付けが終わると保育室に集まる。この後に、修了式の練習を園全体とする予定になっていて、すぐにホールに椅子を持って移動した。

練習は、年少児、年中児が見守る中、修了証書を園長先生(この日は主任教諭が代役を務める)から授与される場面と年長組が歌を歌う場面である。式の流れに沿って、この二つの場面を通して行い、練習はそれぞれ一回ずつで、繰り返さずに行われた。

それが終わった後に、保育者からは、以下のようなフィードバックが子供たちになされた。

「すごい、良かったよ。ただね、またね、一個だけお願いがあります。」「証書をもらう時に、お母さんやお父さんも、年少さんと年中さんもいっぱい拍手をしてくれるんだけど、みんなはお祝いをしてもらう人なので、みんなは拍手をしません。お友達がもらっているときは、拍手を我慢してじっとしててくださいね。」という話が、保育者から子供たちにされた。

その後は保育室に戻り、残り数日の「みんなでしたいことリスト」から鬼ごっこが選択され、クラス全員で再度ホールに移動して楽しんだ。

(11) 事例④の考察「自分ごととして参加する行事の意義」

自発的な遊びを通しての指導や、幼児期にふさわしい生活など、幼児期の教育の中で、修了式のような「式」という行事はどのように各園で取り入れられているだろうか。

この場面は、年長児にとって最後の園行事である修了式の練習である。全員が参加する行事であり、いわば半強制的に参加する行事ではあるが、そうした堅い雰囲気はこの場面ではあまり感じられない。厳かな雰囲気ではあるが、緩やかでもある。子供たちは、保育者のフィードバックによって、「自分たちがお祝いされる式」であることを改めて確認したが、そのフィードバックの内容も、どちらかと言えばユーモラスな雰囲気が漂う。こうした厳かな雰囲気が、温かな緩やかさのベールで包まれているような式が想像される。

また、保育者の言葉によって、年長児にとっては自分ごとの式であり、自分が主になる行事であることが再確認されている。こうして式に参加することで、そこへ向かう意欲を持ち、そこで自分がどのように過ごすべきか、その態度を自ら考え実行することにつながる。

こうした子供たちの姿は、「自立心」、「道徳心・規範意識の芽生え」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」の育ちと捉えられる。

(12) 事例④「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との照合

「自立心」

行事を自分ごととして捉えるために、保育者も意図的に子供たちへ知らせ、そこへ参加しようとする意欲を引き出す。

しかし、「参加する」という気持ちを抱く主体はやはり子供である。その際、参加したいという気持ちを持つとともに、自分がそこでどのようにしなければいけないか、ということも併せて考えるのではないだろうか。

また、自分ごととして捉えた時にも、同じように、しなければならないことという認識を持つと考えられる。この時に、自立し、自ら考える経験として積み重ねている。

「道徳心・規範意識の芽生え」

年長児はそれまでの経験から、この修了式がどのようなものであるか、その雰囲気や、これまでの年長児の姿を見てきている。

その上で、この式でしなければならないこと、式の基本的なルール、そこですべき振る舞い方などを理解していると考ええる。

また、その理解のもと、自分自身の行動につながっているのだろう。この式の練習は、この時は繰り返されなかった。この理解が十分になされているからこそであり、これまでの学びによるものである。

「言葉による伝え合い」

保育者からの投げかけを真剣に聞く姿から強く感じられた。話を聞く態度は、もちろんその態度を具体的に知らせることも求められるが、「話を聞きたい」という気持ちをもてるように支えることも必要であ

る。保育者のかける言葉に含まれるユーモアは、そうした気持ちを引き出す大事な要素でもある。こうした幼児教育におけるユーモアは、人の話を聞く面白さに通じ、それが積み重なっていくと、言葉で伝え合う力の高まりにつながる⁸⁾。

「豊かな感性と表現」

この時の子供たちの心情はどのようなものだろうか。修了式の練習も、その後の学級活動も、残り数日を意識せずにはいられないだろう。

そうした状況や雰囲気を、子供たちなりに全身で感じたり味わったりしながらその数日を過ごしている。ここで、またこの時にしか味わうことのできない心情を直接経験しているのである。

それまで慣れ親しんできた園という環境から巣立つ喜びや、新しい環境に向かっていく不安さが混ざり合った心情を経験していると言える。大きく心が動かされる体験をしている。

4. まとめ

(1) 幼児期の終わりの姿から捉えられること

この時期の幼児の姿は特徴的である。自信を持って自分たちの生活を生き生きと展開していく姿も見られれば、間近に迫った友達や保育者との別れに寂しさを感じたり、小学校への入学に不安を示したりする姿も見られる。こうしたポジティブさとネガティブさが同時進行していくのである。

ただ、育ちとして考えた時、また育ちとして捉えようとした時に、ポジティブな面だけが育ちにつながるとは言えない。今回紹介した事例の子供たちの姿のように、不安や葛藤なども、この時期の育ちには大きく関わっていることがわかる。

そしてそれは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と照らし合わせることで、より明確に、具体的に理解することもできるだろう、こうした営みを繰り返しながら、保育者自身も子供の姿やしていることの価値を捉えていくことが可能になる。

(2) 幼児期の終わりの姿までの過程をどのように捉えるか

今回示した事例における幼児の姿を捉えた時に、このクラスの担任教諭からは、この姿につながる過

程の中での経験や、学びとして得ていること、積み重ねていることの重要性が示された。

例えば、事例①の車のコース作りの場では、段ボールで配置していく道路と道路がほぼ直角に交差している。それまでの遊びの中で、道路や交差点のイメージを具現化する時に、直線であること感覚や、その直線同士が直角で交わること感覚を経験してきたからこそである。

幼児期の終わりの姿だけでなく、そこまでの過程の中での育ちや、経験していることの意義や意味についても、幼保小で可能な限り共有していくことが望ましい。

(3)「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を小学校教育と共有するために

幼児期の教育に携わっている者にすれば、この時期の子供たちのしていること、経験していることと「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とをつなげて捉えることは難しいことではない。

しかし、小学校の教師がこの時期の子供の姿を見た時に、同じように捉えるかという、それは必ずしも一致するものではないだろう。

むしろ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼保小の保育者と小学校の教師が、その育ちの価値を一致させるためのものではなく、互いの育ちの捉えを対話を通して考え合うきっかけとして活用し得るものであると考えたい。

そのためにも、こうした子供たちのこの時期の姿を、可能であれば直に小学校教師にも見てもらいたいし、それを見た上での育ちの捉えをもって、互いの教育の理解につなげていってほしい。

幼児と児童との交流経験や、研修や研究での教職員同士の交流ももちろん有意義な機会ではあるが、互いの教育を実際に見た上で対話することが求められる。

5. 註及び参考、引用文献

- 1) 幼児教育において育みたい資質・能力として、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」が示された。
- 2) 文部科学省「幼稚園教育要領」第1章総則 第

2 幼稚園において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」 3, 2018

3) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」p53, 2018

4) 文部科学省「幼稚園教育要領」第1章総則 第3教育課程の役割と編成等 5 小学校教育との接続に当たっての留意事項(2), 2018

5) 札幌市立きくすいもとまち幼稚園「令和4年度教育課程・指導計画」, 2022

6) 渡辺英則「理論と実践をつなぐ真の制度とは」発達138号p13, 2014

7) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」p16-17, 2018

8) 差波直樹「保育者と子どものかかわり～保育におけるユーモアの役割」八戸学院大学短期大学部研究紀要第46巻p1-10, 2018

謝辞

最後に、本研究にご協力をいただきました、札幌市立きくすいもとまち幼稚園の園長先生をはじめ、教職員の皆様、年長児クラスの子供たちに心より感謝し、御礼申し上げます。ありがとうございました。

執筆者紹介（所属）

差波直樹 八戸学院大学短期大学部

幼児保育学科 教授